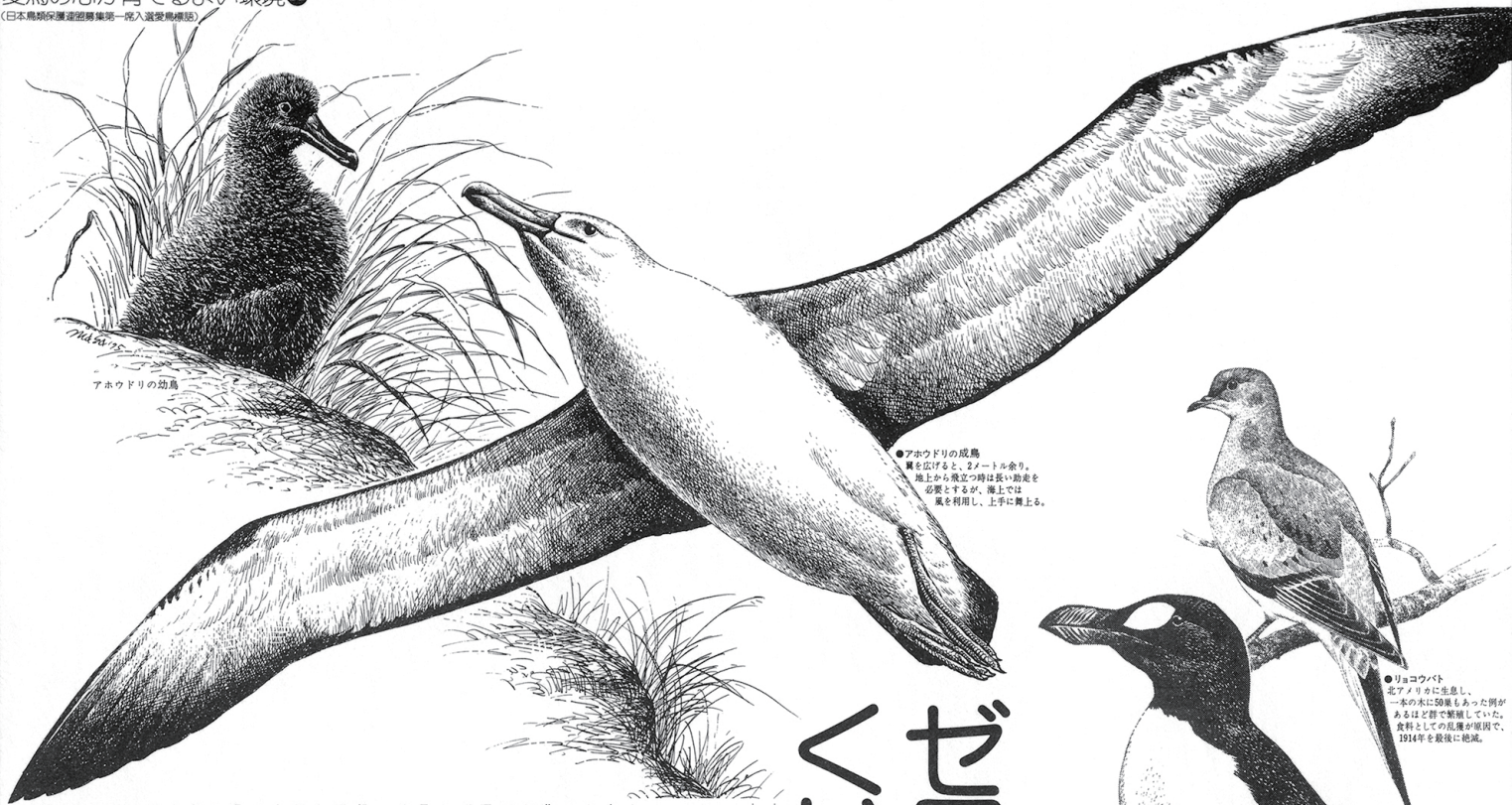




アホウドリの幼鳥

●アホウドリの成鳥
翼を広げると、2メートル余り。
地上から飛立つ時は長い助走を
必要とするが、海上では
風を利用し、上手に舞上る。



●リョコウバト
北アメリカに生息し、
一本の木に50巣もあった例が
あるほど群で繁殖していた。
食料としての昆蟲が原因で、
1914年を最後に絶滅。

●オオウミガラス
大西洋北部の島にすんでいた。
北半球で飛ぶことの
できなかった唯一種の鳥。
1844年を最後に絶滅。

ゼロへの道を くい止めるもの

アホウドリの悲劇

「……シラフ（アホウドリのこと）ハ沖ノカモメ、マタ馬鹿鳥トモ云、南海ニ住ムヨシ、鳥ノ形大ニシテ、羽ヲ広グレバ六尺余（約二メートル）モアリテ……江戸時代の書八丈物志より、長い翼を下げ気味に、吹いてくる風をうまく利用して、滑るようにゆうゆうと飛ぶ。この鳥にどうしてアホウドリという名が与えられたのでしょうか。生息地が広い海であるために人とのかかわりがなく、人を恐れないこと、集団で繁殖しているが、隣りの鳥が殺されても平気だったり、手でさわられるほどに近づいても逃げることしない」などによる理由だと思われまふ。つまり、ヒトが近づけばヒトは逃げ回すもの、という考えしかなかった人間に名づけられたわけだ。ヒトを見たら逃げ回すと思わせたようにしたのは、実は人間だったのですが。

アホウドリの現在の繁殖地は、伊豆七島南部の島鳥が、ただ一カ所、確認されています。明治二十一年の調査では、文字通りトリの島として周囲約七キロの島いっばいに、数十万羽のアホウドリがいたと推定されていたのですが、やわらかい豊かな羽毛がむざむざとなつて、その後十五年間に、のべ五百万羽以上が殺されました。昭和四年の調査では約二千万羽と急速に減り、昭和七年は数百万羽、同十四、十五年には、ごく少数が見られる」となり、二十二年にはついに発見されず、絶滅」と発表されました。うれし再発見が報告されたのは昭和二十九年、およそ二十羽、三十九年には最大数五十二羽、現在は約百羽と推定されています。十五万羽で五百万羽を殺した人間の力は、いっぽうでは、二十年間で、その数をやっと五倍の百羽にしか、増やすことができないのです。

絶滅を、ヒトの未来にしないために

すでにヒトは、この種の悲劇をたくさん動物に及ぼしてきました。十七世紀にドードーという鳥が、十八世紀末にブルーバツクというオウモウ鳥が、十九世紀なかばにはオウミガラスが二十世紀には、一つの群れに二十億羽もいたというリョコウバトが絶滅しました。そしていま、危機にあるのは、タンチョウ、コウノトリなどなど……ヒトは動物や植物を、思いのままにたくさん殺す武器を持つていても、ヒトの力ではアホウドリ、鳥類のアーバースをふくめないのです。

どんな動物が絶えてしまいたいのかは、ヒトをくめて、あらゆる生物が調和を保つて生存を続けている世界です。自然の破壊は最後にはヒト自身さえ、ゼロへの道に追いこんでいく、ということを、すでに絶滅してしまつた動物たちの姿に見いだしていたいたくないと思ひます。

アホウドリが、文字通りアホのままで、太平洋ののんびりとした姿をたくさん見かけると、私たちはそのための努力を惜しむことがあつてはならないと考えます。いまヒナは、アヒルくらい大きさに育ちました。



ヒトの心の中心に「トリ」の保護を

財団法人日本鳥類保護連盟
サントリー株式会社

●この広告は、サントリー株式会社から提供されたもので、サントリー株式会社が制作したものではありません。